
千夜一夜

佐月夏蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千夜一夜

【Nコード】

N2810Y

【作者名】

佐月夏蓮

【あらすじ】

教会を兼ねた孤児院で育てられた青年アベルは、今日も貴族嫌いのシスター・エルのせいで仕事をひとつ潰されてしまう。

吟遊詩人をやって生計を成り立っている彼にとって、貴族も裕福な金持ちも大事なお得意様だ。

しかし貴族嫌いのシスターのせいで、彼はよく仕事を潰される。

運命の岐路を迎えたこの日もそうだった。

運命の運び手の少女と出逢ったときも、彼は仕事を潰され時間を
持て余していたのだ。

深い意味のないような、どこにでも転がっている出逢い。

それが自分の運命を根底から変えてしまうとも知らずに。

彼はひとつの出逢いを体験する。

その出逢いが次の出逢いを呼び、アベルの運命は急速に変わって
いくのだった。

この物語はブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

序章（前書き）

新しい物語の始まりです。

本当はもうすこし様子を見るつもりでしたが、ブログの方で問題が発生したので、新連載に踏み切りました。

「失われた恋人く時に消えた伝説く」 共々よろしくお願いします。

序章

今日も穏やかに夕陽が沈んでいく。

何事もなく日は過ぎて人々が家路につく頃、青年はじっと中空を眺めていた。

今日は久しぶりの貴族の邸宅でのパーティーにお呼ばれしていたのだ。

彼、アベルはそういう儲けられる機会は、なるべく逃さないようにしている。

ただでさえ裕福とは縁のない生活なのだ。

儲け時を誤ってはならない。

なのに。

口から深々とため息がもれる。

「エル姉に今日の仕事場が、貴族のパーティーだって知られたのが失敗だったな」

噴水の傍に腰かけたまま、だれにともなく愚痴る。

彼の姉代わりでもあるシスター・エルは大の貴族嫌いだ。

貴族と名のつくものなら、なんでもキライで、寄付金なども絶対に受け取らない。

相手が好意や善意で申し出ていても、だ。

おかげで生活はいつも火の車。

アベルが小さい頃に遊びで覚えた吟遊詩人の腕前がなかったら、果たして今頃生きていたかどうか怪しい。

とっても怪しい。

なにしろ教会は孤児院も兼ねているのに、エル姉は寄付金を受け取らないのだ。

貴族が名をあげるためとはいえ、善意を前面に申し出ていても。

そのためにアベルが小さい頃などは食べる物にも困る始末。

アベルが何気なく始めた吟遊詩人が大当たりしなかったら、きっと自分も子供たちも飢え死にしていた。

しかし吟遊詩人を名乗るからには、儲けるために貴族や裕福層は避けては通れない。

彼らこそ吟遊詩人に大金を投じてくれる相手だからだ。

選り好みしていたら、得られるお金も得られない。

しかしエル姉にはその論理も通じない。

とにかく「いやっ!!」の一点張りで通してしまうので、アベルはなるべく自分の仕事先は知られないようにしている。

普段からとても気をつけていたのだ。

なのに今日に限って知られてしまった。

「忌々しい」

呟いてポケットからカードを取り出す。

今日のパーティーの招待状だ。

これがないと入れないとかで、パーティーで演奏するだけのアベルにも送られてきた。

それですべてがバレてしまった。

エル姉は恐ろしい勢いで怒り狂い、アベルを部屋に閉じ込めた。

パーティーに出られない時間帯になるまで。

おかげで解放された今、こうしてすることもなく、夕陽を眺めている状態だ。

貴族はここ最近の怪盗騒ぎのせいで、開場時間を過ぎると、招待状を持っていても会場には入れてくれない。

その時間はとくに過ぎていて、つまり招待状があつて、パーティーには欠かせない吟遊詩人でも会場には入れないのだ。

「これでまたひとつ信頼を失ったなあ。もし悪い噂でも広がったら、俺、どうするんだ？」

さすがに心配だ。

今では孤児院を支えている生活費も教会の維持費も、捻り出しているのはアベルだというのに。

悪い噂が広がって仕事がなくなったら、とたんに生活は成り立たなくなってしまう。

「とりあえず……こんなところでブーツとしていてもしかたがないから帰るか。フィーリアも心配しているだろうし」

エル姉に閉じ込められた後で、さすがに怒って孤児院を飛び出してきたので、妹代わりのシスター見習いフィーリアが、とても心配そうに見送っていた。

それはわかっていたのだが、あのときはだれのせいで苦勞していると思つていいのかと思うと、どうしても我慢できなかったのだ。

立ち上がったとき、だれかにドンツとぶつかられた。

完全に不意をつかれたので上体が揺れる。

「あっ」

高い声が悲鳴のような声を出すのを聞きながら、アベルの身体はそのまま噴水の中に落ちていった。

序章（後書き）

第1章は毎日更新します。

第2章は1日置きに第3章からは土曜日の配信になります。

第1章 教会と孤児院（1）

「踏んだり蹴ったりだ。ついてない」

連れに聞こえないようにアベルは愚痴る。

噴水に突き落とされた後、アベルは啞然として相手をみたが、相手はそれは可愛い女の子だった。

長い金髪を背中中でひとつに括っていて、可愛いエプロンドレス姿。

一見して良家のお嬢さんといった風情だった。

アベルにぶつかって噴水に突き落としてしまったことでオロオロしていた。

さすがに怒るに怒れず、アベルは気にしなくていいと笑ったのだが、どういうわけか相手の少女は気に病んで引かなかった。

いくら責任感が強い少女だったとしても、ちょっと異常なほどに。

それでそれとなく探りを入れると、どうも少女は行くアテがないらしかった。

ここで出逢ったのが救いとばかりに、アベルになついてきた次第である。

呆れて突き放そうかと思ったが、その事情を聞いた瞬間、少女のお腹がなった。

少女は赤くなってお腹を何度も叩いていたが、これには怒る気も失せてしまった。

それで結局、孤児院まで連れていくことになっている。

まあ元々が身寄りのない人々の集まりのようなところだ。

ひとりやふたり増えたところで困る人はだれもない。

しかし相手のことをなにも知らない状態で連れていくのも変だ。

さりげなく振り返る。

少女は後ろをついて歩きながら、物珍しそうにキョロキョロしている。

その様子からみて、絶対に行くアテがないなんて嘘だろう、と、アベルは内心で突っ込む。

おそらく帰る家はあるのだ。

あるのに帰る気がない。

もしくは帰れない。

そんなところだろうか。

どこかの裕福な家のお嬢さんが、親とケンカして家出でもしてきた。

そんなところかなとアベルは考える。

「きみ……名前はなんていうの？」

「名前……ですか？」

突然話しかけられた少女は、幾分、身構えた様子をみせた。

「そう。名前。呼ぶ名前がないと不便だし。あ。俺はアベル。アベルっていうんだ」

「アベルさ……んですか。素敵な名前ですね」

微笑んでそう言うってから、少女はすこし間をあけた。

「わたしはレティといいます」

答えてきた少女にアベルは一瞬だけ視線を向けたが、なにも言わず「そう」と答えた。

本名じゃないかと読み取りながらも。

「これから俺が帰る家は孤児院だがら、ちょっと騒がしいかもしれないけど、あんまり気にしないで」

「孤児院？」

「身寄りのない者が集まって暮らしてるところだよ」

わからないかなと思って説明すると少女は赤くなる。

「そのくらいわかります。わたしにだって」

ブツブツと口の中で愚痴っている。

どうやら意味が通じたらしい。

「でも、それだとわたしが行ったら、ご迷惑ではないですか？」

「困ってる人を助けるのが教会の役目だから」

「教会？ さっきは孤児院って……」

「教会が孤児院を兼ねてるんだ。この辺だと珍しいらしいけど」

「たしかに珍しいですね。普通は孤児院と教会は別々だし」

そこまで言うてから、少女は首を傾げた。

「それだと生活はどうやって？ 教会への寄付金だけでは食べていけないのでは？」

「あー。うん。その辺は適当にね」

「適当……」

適当でなんとかなるのだろうか、少女の声に出ている。

しかしそこまでの内情を明かす必要性を感じなかったので、アベルはなにも説明しなかった。

「とりあえず怒られる覚悟だけはした方がいいな」

「どうしてですか？ あ。それはわたしが怒られるのはわかりますけどっ」

「いや。数少ない余所行きの服を汚したから、姉代わりのシスターに責められるんだよ」

ここまで言ってアベルは肩を竦めてみせる。

「この服を買うのに、どれだけのお金が必要だったと思ってるってね。それにこの服は普通に洗濯できないし」

カードが届く前に出掛ける準備を整えていたので、アベルはパーティー用の正装を着ていた。

アベルにしてみれば、かなり奮発して買った服だ。

それはエル姉も知っているので、この系統の服を汚すと、それはそれは責められる。

本当に普通に洗濯できないらしくて、使う洗剤やら洗い方やら、すべて特注になるらしい。

高価な服というのは扱いも特殊らしいのだ。

その辺はフィーリアに任せきりだから、アベルは詳しくは知らない。

だが、だからこそ、このことで責められると強く言えないのだ。

フィーリアに迷惑をかけたと責められると言い返せないのだ。

しかしアベルが思索に耽っているあいだ、少女はふしぎそうに首を傾げていた。

「せんたく？」

意味を知らないと言いたげな声にアベルが振り返る。

少女はそれはふしぎそうな顔をしていた。

（もしかして？）

「洗濯……知らない？」

「あ。いえ。知っています」

「ふうん。知ってるんだ？」

白々と問えば少女は必死になって頷いた。

どうやらこれでごまかせると思っているらしい。

思っていた以上の箱入り娘だ。

これはそうそうに迎えがくるに違いない。

それまで丁重に相手をすればいいかと、アベルはさっそく覚悟を決めた。

こういうお嬢さんの道楽には、まともに相手をしないにかぎる。

でないとエル姉がキレるし。

第1章 教会と孤児院（2）

教会がみえてきて隣に建っている大きい古ぼけている建物の扉を開ける。

少女もおっかなびっくりついてくる。

「フィーリア。ただいまー」

声を投げるときも、どうしてか「エル姉、ただいま」とは言えなかった。

いつもなら「エル姉、フィーリア。ただいまー」なのだが、このときばかりはエル姉の名前は出せなかった。

「あっ。おかえりなさい、お兄ちゃんっ!!」

シスター姿のフィーリアが現れた。

金髪を肩で揃えていて瞳は紫。

自慢の妹だ。

「ただいま、フィーリア」

頭を撫でるとフィーリアが幸せそうな顔になる。

まだ14歳。

それなのに家事をすべて任せて、おまけにシスター見習いとしての仕事もある。

苦勞させてるなとつくづく思う。

「お兄ちゃん、その人、だれ？」

「ああ、うん。レティっていうんだって。行くアテがないとかで、腹を空かせてたから連れてきたんだ。なんかある？」

「んー。お夕飯の残りなら。あ。お兄ちゃんの分もちゃんとあるよ？」

「わかってるよ。フィーリアが俺の分を食べるとは思ってないから」

「それからお姉ちゃんがお兄ちゃんに謝っていてほしいって」

「……」

「お姉ちゃん、とても後悔してたよ？ 自分の価値観を押しつけたって。全部お兄ちゃんのお世話になっているくせにでしゃばりだったって。お兄ちゃんが出て行った後で泣きそうな顔してた」

「……そっか」

エル姉はたしかに貴族がきらいで、貴族絡みだと暴走してしまう。

だが、感情で動いても、こうやって反省することのできる女性だ。

だから、アベルは彼女をきらえないのだ。

どれほど苦勞させられていても。

今頃、教会の掃除でもして反省している頃だろう。

後で慰めておこうと心に決める。

そうして控えめに立っている少女の方を振り向いた。

「こっちにおいで。食べさせてあげるから」

「ごめんなさい。ご迷惑でしょう？」

レティがそう言えば、あからさまに怪訝な顔になって、フイーリ
アがアベルの耳許にささやいた。

「お兄ちゃん。このお姉ちゃん、帰る家がないなんて嘘でしょ？
こんな上品な孤児みたことない」

「ああ。たぶん家出だと思う。まあ本人が家に帰れないって言うんだ。今は面倒をみておいて迎えがきたら、そのときに考えればいい
だろう？ 本人が帰りたいがるかどうかは別として」

「エルお姉ちゃん、怒るよ？ もしこのお姉ちゃんが貴族だったり
したら」

「そうだったとしても、困ってることには違いない。エル姉がそこ

で追い出すのは、シスターとして失格だろ？　そこはフィーリアも説得しろよ。とにかく飯も食えないくらい困ってるのはたしかなんだからさ」

「食べられるだけのお金があって食べないのに困ってると言われても……」

「あいな、フィーリア。貴族って案外、金持っていないものなんだ」

「そうなの？」

きょんとした顔になるフィーリアにアベルは重々しく頷いた。

「金持ち金持たずっていうのかな。貴族は出歩くときに金を持ち歩かない。つまり家出なんてしても、食べるお金は持っていないってことなんだ」

「それで家出してなんとかなるの？」

「普通なら悪い奴にさらわれて終わり、なんだろうけど、この娘の場合、俺と逢ってるからな。その分、運がよかったってことで」

「お兄ちゃんの貧乏クジを引く損な一面変わってないね」

呆れたように言われて、アベルは慌てて咳払いした。

「とにかくっ。飯だ、飯っ!!」

アベルは大股に歩いて行ってしまう。

フィーリアはクスクス笑って、呆気に取られているレティの方を振り向いた。

「お兄ちゃん、先に行っちゃったから追いかけよう？」

「あ。はいっ」

慌てて返事をするレティに世間知らずな一面が覗いて、フィーリアは改めて実感した。

レティの運のよさを。

アベル以外に拾われていたら、今頃どうなっていたか。

その辺をわかっていないらしいので、レティの運のよさも本物だと感じていた。

第1章 教会と孤児院（3）

時刻は深夜。

孤児院の一室に院長兼神父のシドニーとシスター・エル。

そしてシスター見習いのフィーリア。

最後にアベルが集まって頭を悩ませていた。

「どうするの、アベル？」

シスター・エルは不機嫌だ。

明らかに自分たちとは住んでる世界の違う少女をアベルが連れてきたのだ。

おまけにすぐくると思っていた迎えはこなかった。

少女レティは今健やかに眠っていたりする。

一応あの後エルにも紹介して、シドニーの許可ももぎとり、レティはここへの滞在を許された。

しかしそれはだれもがすぐに迎えがくると踏んでのことだった。

全く迎えがこないと言うのは想定外だ。

彼女の身なりこそ、そこそ上等だが一般の平民と言っても通用するていどだ。

だが、立ち居振舞いというのだろうか。

みせる態度や振る舞いが、どうみても平民のそれではない。

明らかに貴族層、違っても裕福層のものだった。

アベルたちと同レベルではないのは明らかだ。

そんな少女を匿っていたら、最悪、誘拐ととられるかもしれない。

シスター・エルはそれを危惧しているのである。

保護しているだけなのに誘拐したと思われるのではないかと。

「とりあえず本人が身元については話したがらないんだ。今はどうすることも……」

シドニー神父が言いかけたとき、人一倍耳のいいフィーリアが立ち上がった。

「だれかきたみたい。この靴音……マリンお姉ちゃんかな？」

「「マリンが？」」

アベルとエルの声が重なる。

やがてすぐに控えめなノックの音がした。

「シドニー様はいらっしゃいますか」

そんな挨拶を投げながら入ってきたのは、女だてらに騎士をやっているマリンだった。

この近所が実家でアベルたちとも兄妹同然に育ってきた少女である。

凛々しい立ち姿にエルが嬉しそうに出迎えた。

「久しぶりね、マリン。こっちに戻ってきたのは何年ぶり？」

「お久しぶり、エル姉。さっそくで悪いけど……レティがこなかった？」

「レティって……マリン、知り合いなのか？」

アベルが驚いた声を出すと、マリンがその漆黒の瞳を光らせた。

「アベル。またアンタなの？」

「いや。また俺かと言われても……」

「迷子を見つけたらすぐに騎士団に報告すること。何度言わせたら気が済むのよ？　ここに連れ込むなってっ！！」

「迷子って……レティはどう見ても15は過ぎてるだろう？ 16くらいじゃないのか？」

呆れ顔になるアベルにマリンは強気で言い切った。

「家に帰れなくなってるなら迷子でしょうがっ!!」

「そりゃあそうかもしれないけど、飯を食わせるくらいいいじゃないか。本人だって見知らぬ俺の前で腹を鳴らすほど減ってたんだし」

「ああ。お劳しい」

頭を抱え込むマリんに、どうやら彼女が迎えらしいと悟って、シドニー神父が割り込んだ。

「それでマリンは彼女を迎えにきたのかい？」

「迎えと言いますか……」

「違うのかい？」

「いえ。迎えには違いないのですが、レティが素直に戻られないのではないかと危惧していて」

マリンはシドニーを尊敬しているので、あからさまに態度が違う。

我が身と比べれば多少は不満も出るが、アベルは納得して呟いた。

「まあなあ。彼女は身元に関することは、一切話さなかったし。明らかに家出って感じだったからな。マリンが迎えにきたところで素

直に帰らないだろうけど」

「アンタねえ」

マリリンが呆れている。

どうやら説得しろと言いたいらしい。

たしかにアベルは子供の世話は慣れているし、職業柄。女性の相手も慣れている。

普通なら説得くらい容易いのだが、なんとなく気が進まなかった。

それはたぶん彼女が見知らぬ世界を一生懸命、知ろうと努力していたからだろう。

レティは知らないこと、わからないことを、わからないままでは終わらせなかった。

わからなくても理解できなくても、必死になって理解しようと自分でも同じことをしようと努力していた。

でなければとつくに騎士団に報告している。

家出なのははっきりしていたし、罪に問われる可能性も熟知していた。

だから、普通なら届け出ているのだ。

レティが世間を知ろうと、あんなに必死でなければ。

第1章 教会と孤児院（4）

家出したのにもなにか理由があるんだなと、親子喧嘩くらいの理由ではないと知ったから報告する気が失せた。

そのことではエルにもシドニーにも問われていたアベルである。

同じことをマリンに責められても答える言葉がない。

「説得する気がないの？ アンタが説得すれば一発でしょうに」

「マリンが彼女と親しいならわかるはずだ。これは軽い気持ちでの家出か？」

「……」

「彼女には彼女の考えが意志がある。それを無視して連れ戻そうとするなよ。そりゃ彼女の両親でも出てきたら、俺だって素直に説得するけどさ。親に心配をかけるのは、やっぱりよくないと思うから」

天涯孤独のアベルが言うのと重さのある言葉である。

とっさにマリンも言い返せなかった。

「説得したければ自分でやれよ。俺を頼るな」

「アベル」

「お兄ちゃん。そんな言い方……」

「俺の目からみて彼女は自分に必要なことをこなしているように見える。だから、俺からは説得したくない。それでも説得したければ自分で説得しろ。他人を頼るんじゃない」

「わかった。もう頼まないからいい」

マリンは唇を噛みしめてそう言った。

「シドニー神父。レティはどこですか？」

「2階の客室で寝ているよ。しかし今から起こすのかい？ 明日に
してあげたら」

「レティのご両親がとても心配されています。連れ戻すのがわたしの役目です。申し訳ありませんが」

それだけ言ってマリンは踵を返した。

それからしばらく経っても、マリンは2階から降りてこなかった。

時折、言い争うような声が聞こえてくる。

それを階下で聞きながら、アベルたちは難しい顔をしている。

案の定レティが帰ることに同意しないらしい、と。

やがて仏頂面のマリンがひとりで階段を降りてきた。

「マリン？」

シドニーが心配そうな声を投げる。

「玉碎しました」

「そう……なのかい？」

「申し訳ありませんが、しばらくレティをお願いします。わたしは彼女のご両親に報告して、なんらかの手を打ちますので」

「それはいいけど彼女……どこの家の令嬢なの？ まさか貴族じゃないでしょうね？」

「お姉ちゃん……」

フィーリアがエルの手を引っ張るが、エルはマリンを睨む眼を外さない。

アベルとシドニーは男同士で顔を見合せた。

「ごめんなさい、エル姉。それについては触れないで」

「マリン……」

エルが複雑な声を出す中、マリンがアベルを振り向く。

「ちょっとしたときで」

「なに？」

「いいからきなさいっ!!」

怒鳴られてアベルは孤児院の外まで連行された。

人気がない静かな住宅街。

マリンと向かい合って立ち、アベルは不思議そうな顔をしていた。

「アンタは貴族にも顔がきくでしょうし、隠しても隠せないだろうから、今から教えておくわ」

「彼女の素性について？」

それしかないと思って問うとマリンは苦い顔で頷く。

「アンタが貴族相手に商売してること、わたしは忘れてないわよ」

「だろうな。仕事柄知られてるとは思ってた」

「アンタって飄々としてるのに、肝心なところでボケてるというか。それだけ顔が広くてどうして気づかないの？」

「なんの話？」

首を傾げればマリンは絶望的な顔をした。

「レティと聞いて、あの金髪と銀の瞳をみて、どうして気づかない

の？ アンタほど貴族の事情に通じた人が」

「レティ……金髪、銀の瞳？」

呟いてふと思い出す。

噂に聞いていた人の名を。

「まさか……レティシア王女？」

このディアンの王女で姉、レイティアと共に第一王位継承権をもつレティシア。

彼女は第一王女レイティアとは双生児で、従ってその関係で王位継承権も同等。

第二王女だが情勢次第では女王になるかもしれないという立場にいる。

呟けばマリンが苦い顔のまま頷いた。

第1章 教会と孤児院（5）

当たっていたと知って青くなる。

「自立を歓迎したい。アンタさっきそんなこと言ってたけど、そういうワガママが許されるお立場だと思う？」

「それは……」

彼女が王女ならたしかにこの行動は無謀と言わざるを得ない。

本当にアベル以外が拾っていたら、どうする気だったんだろう。

「わたしだってレティシア様が自立をしたいなら歓迎したい。そのための手助けだってしたいと思ってる。でも、現状は無謀よ」

「たしかに……」

第一王女ではなく第二王女を擁立したい派閥はいる。

現実に存在するのだ。

そんな輩に捕まっていたら利用されただろうし、第一王女派に捕まるのも危険だ。

たしかにマリンがキレルだけの理由があったのだと今更のように納得した。

しかし一般の平民であるアベルが、そこまで貴族の事情に詳しい

のもどうかと思うが。

マリンがそのことに疑問も抱いていないことが、なおさら変な気分だ。

アベルはそこまで貴族の世界に踏み込んでいるのだろうか？

「レイティア様だってご心配されているわ。レティシア様はレティシア様だけのお考えで動けるお立場にはないの」

「それは本人もわかってるんじゃないかな」

「アベル？」

「俺がさつき自立したいならさせればいいって言ったのは、彼女が必死になって世間を知ろうと努力していたからだ。少なくとも無責任な行動じゃない。俺はそう感じたよ」

「でもっ」

「過保護なだけではなにも変わらないよ」

「無責任なことと言わないでっ。それでなにかあったら、だれが責任を取れるのっ!？」

「マリン。少なくとも王族なら、国を統べるべき立場に立つのかもしれないなら、自分の言動の責任は自分で取るべきだ」

「……それじゃ通らないのよ、現実は」

「自分の後始末もできない者が国を統べる。それでいいと思ってるのか、マリン？」

「それは……思っていない。思っていないけど実際になにかあったら、責任を求められる者が絶対に出るのっ」

「それを片付けるのも彼女の責任だろ？」

「どう言っても譲らないアベルにマリンは深々とため息をついた。

「アベルってホントに頑固だわ。しばらく忘れてたわ」

「悪いな。だれ譲りかは知らないけど頑固で」

「バカ」

呆れたように言い返してから立ち去ろうとして、ふとマリンがアベルを振り向いた。

アベルは不思議そうにそんな彼女を見る。

「アベルは……」

「なに？」

「だれ譲りかはわからないってさっき言ったけど、わたしよく似た人……いえ。御方を知ってるわ」

「へえ。マリンの知ってる偉い人に俺が似てるって？」

「柔和そうな顔立ちなのに、一度決めたことを譲らないところなんてそっくりよ」

笑う彼女に笑ってみせた。

遠ざかる彼女を見送って、ふと左腕に視線を落とす。

服の下に隠された物を思い浮かべる。

それはずっしりと重い気がした。

「おはようございます」

翌朝、食堂に現れたレティことレティシア王女は、そう言って深々と頭を下げた。

受け入れたアベルたちは驚いた顔をしている。

「昨夜はマリンがお騒がせして申し訳ございませんでした」

「いや。それはいいのだが……帰らなくていいのかい？」

シドニー神父の優しい声に、レティシアが答えようとしたとき、表で馬の蹄の音が響いた。

ハッと彼女が顔色を変える。

アベルは窓からそつと外を覗き込んだ。

道を塞ぐようにして、豪華な馬車が止まっている。

ただし身分がバレないように配慮されたのか。

王家所有の馬車ではなかった。

その扉を恭しくマリンが開けている。

優雅におりてくるのはレティシアと同じ顔をした女の子。

おそらく第一王女レティシアだろう。

さすがにふたり揃ったらエル姉にバレるんじゃないかとアベルも青くなる。

「アベルさん？」

彼女の呼び声にアベルは苦い顔を向けた。

「お姉さんが迎えにきたみたいだよ、レティ」

「え……どうして知って……」

青ざめるレティシアにアベルは苦い笑み。

第1章 教会と孤児院（6）

「俺さ、これでも吟遊詩人なんだよ。そういうことには詳しいから」

「吟遊詩人？ あの舞踏会などでもよく演奏する？」

「そう。だから、俺に隠そうとするのは無理」

「そうだったんですか。騙して申し訳ございません」

深々と頭を下げるレティシアにアベルは微笑んでみせる。

「悪気がなかったことはわかってるから構わないさ」

「ですが」

「俺に対する言い訳よりお姉さんに対する言い訳を考えた方がいいんじゃないか？」

「そうですね。どうしましょう」

オロオロするレティシアに昨日の彼女が思い出される。

本当に箱入りなんだなあ、と。

自分とは偉い違いだ。

「どうしてお兄ちゃんがレティさんのお姉さんを知ってるの？」

フィーリアの声にアベルが振り返る。

シドニーもエルも怪訝そうにふたりを見ている。

「顔を見ればなんでわかったのか、すぐにわかると思う」

その言葉は間もなく証明された。

何故ならフィーリアが出迎えて連れてきた少女は、レティシアに瓜二つだったからだ。

シドニーもエルも啞然としている。

格好も似たり寄ったりで、入れ代わったりされると、見分けられなくなりそうだった。

「レティ」

マリンに先導され入ってきた少女は、そう名を呟くなり彼女の頬を叩いた。

これにはアベルも啞然とした。

王女同士で殴り合いになるのかと。

だが、レティシアは叩かれても反撃はしなかった。

無言で怒りを示す姉姫に頭を下げる。

「ごめんなさい。姉様」

「悪いことをしたとわかるのなら戻っていらっしやい」

「悪いことをしたとは思ってるわ。でも」

「まだ戻りたくないなんて駄々をこねるつもり？」

「駄々をこねるとかじゃなくて、わたしはもうしばらくここにいたい。お父さまたちだって説明したら、きっとわかってくださるわ」

「だったら先に説明したら？ わたしが迎えにきている時点で、あなたが判断を誤ったことは証明されているわ」

「だって……戻って説明したら、きっと二度と出られない」

泣き出しそうなレティシアにアベルは可哀想になった。

彼女は王女として必要不可欠な行動を起こしているだけなのだ。

説明不足なのは否めないかもしれない。

でも、説明不足だったという理由だけで責められるのは気の毒だった。

さて。

王女殿下をなんて呼ぼう？

悩みつつ声を投げる。

「あのさ、レティのお姉さん」

声をかけられたレイティアがアベルを振り向く。

その眼がすぐに驚きで見開かれた。

「伯父様？」

「は？」

まっすぐに自分を見て言われたが、アベルは一瞬シドニーのことかと誤解した。

「シドニー神父。知り合いですか？」

アベルがシドニーを振り向いて問う。

「いや。あれはどうみてもアベルを見て言ったのでは？」

「え？　でも、俺まだ18ですし、おじさんなんて言われる歳では……」

18でおじさんだったら、シドニーなんておじいちゃんだ。

そう呆れ返るとレイティアも失態に気づいたらしい。

慌てて咳払いした。

「ご、ごめんなさいっ。あなたがあまりに伯父様に似ているので、つい」

「伯父様って亡くなった伯父様？ お父さまの兄上の？ アベルさんはそんなに似ているの？」

「レティは伯父さんの顔、知らないのか？」

「わたしはそういうことには疎くて。姉様が知る必要はないからと、肖像画も見せていただけなくて」

「へえ」

本物の箱入り娘だなとアベルは思う。

双生児の姉からも大事にされていたようだ。

しかしお父さまの兄上ってことは現国王の兄君だよな？

たしか現王は元々は第二王子で、前王が急死したせいで突然、王位を継がなければならなくなったはずだ。

前王には子供はいなかったと聞いている。

その前王にアベルが似ている？

第1章 教会と孤児院（7）

不思議な偶然もあるものだ。

「不思議な偶然だな」

「不思議な偶然？　そう……ですね」

「姉様？」

妹の心配そうな問いかけにレイティアは微笑んだ。

「なんでもないのよ、レティ」

「話を戻すけどレティのお姉さん」

「申し訳ございませんが、わたしにもレイ……という名がございます。そうとう呼び方は不本意です」

悔し紛れにごまかす声にアベルはちよつと笑う。

笑われてレイティアが赤くなった。

「じゃあレイ。俺からも頼むから、もうすこしのあいだだけ、レティの好きにさせてやってくれないか？」

「ですが、これはわたしたちの問題で」

「だからこそ、俺たちの問題だろ？」

「なにをおっしゃりたいのですか」

「レティは将来的に必要な行動を起こしてるだけだ。それは同じ立場に立つレイにならわかるはずだ。ここで得る体験はレティにとって、もしかしたらレイにとってだって得難いものになる」

「……」

「おままごとでもいいんだよ。知らないことを知らないまままで終わらせず知ろうとする努力。それは尊いものだよ」

「ですがお父さまがなんとおっしゃるか」

「そうだなあ。マリンが護衛として付き添う……じゃ納得しないか？」

首を傾げるアベルにマリンが食って掛かる。

「どうしてわたしを巻き込むの、アベルっ!!」

「へえ。じゃあレティを放っておけるんだ？ マリンに？」

「っ」

グッと詰まるマリンにアベルが人の悪い笑みを見せている。

「もしかして1本取られたことを拗ねてる？」

レイティアはアベルに顔を覗き込まれ赤くなった。

なんだかこの人は調子が狂うと顔に書いている。

「まあレティが起こした行動は、本来ならレイが起こすべき行動だろうから、多少は拗ねるだろうなあ」

「あの、アベルさん？」

「わからないか？ レイはレティに負けたから悔しいんだよ」

指摘されてレイティアの顔がますます赤くなる。

レティシアは意外そうに姉姫の顔を見た。

「悔しいのならレイも真似したらいい」

「アベルっ。勝手に話を進めないでっ」

シスター・エルが慌てだす。

明らかに貴族らしいふたりを受け入れるなんて、彼女の的には遠慮したいことだから。

「エル姉、シスター失格。神のお慈悲はどこいったんだ？」

呆れ顔で言われて言葉に詰まる。

シドニーは苦笑していて、フィーリアは不安そうにアベルを見ていた。

「とにかくレイがどうするかはともかく、レティはもうしばらくこのままでいさせてやってくれ。その方がレティのためだから」

真摯に説得されてレイティアは妹姫を振り向く。

「あなたはどうしたいの、レティ？」

「わたしはもっと知らないことを知りたい。知ることは大事だと思うから。それは昨夜散々感じたの。わたしは籠の中の鳥だって。このままじゃいけないって」

女王になるならないは別として王族として、このまま民のことをなにも理解しないままではいけない。

それは昨夜レティシアが感じたことだった。

必死な妹の様子にレイティアはまたため息をついた。

「戻ってお父さまを説得してみます。それまではマリンをつけておくわ」

「ありがとう、姉様っ!!」

抱きつく妹を抱き止めて、レイティアはまたため息をついた。

「あなたはお名前はなんて申されましたか？」

振り向いたレイティアに問われて、アベルが答えようとしたとき、子供が投げ合っていたらしい木の棒が、突然、窓ガラスを割って飛び込んできた。

レイティアに向かって一直線に。

マリンも無言で庇おうとしたが、それよりも顔を覗き込めるほど近くにいたアベルの方が早い。

とっさにアベルは彼女を腕に抱いて庇い、左腕でガラスの破片や木の棒を受け止めた。

「っ」

声にならない声が漏れる。

それは予想外の衝撃を伴ってアベルの左腕を襲った。

シャツが破れ、なにかが露出する。

肌かとだれもが思ったが、それは肌ではなかった。

腕の中に抱き込まれたレイティアはマジマジとそれを見た。

二の腕全体を覆っている、それは黄金の腕輪。

唐草模様を用いていて、幻獣が描かれた華麗な装飾を施された高価な。

孤児院育ちの青年には似つかわしくない品だった。

「これは……」

レイティアの目にも王族でも持てるかどうかの品だとわかる。

思わず腕が伸びた。

触れられて我に返ったアベルが慌てたように身を引く。

「ごめん」

それだけと言ってアベルは部屋に駆け去った。

この腕輪だけは人目に触れないようにしていたので。

その意味はシドニーしか知らない。

あの腕輪は普通の腕輪ではないのだ。

おそらくアベルの身許を証明する唯一の品。

何故ならアベルがこの孤児院に預けられたとき、彼はすでにあの腕輪を身につけていたからだ。

彼が両親の元にいた頃に与えられた。

そう思うべき品。

もしかしたら由緒正しい家柄の子息ではないか。

シドニーはそう疑っていた。

それほど高価な腕輪だったので。

人目に触れないように指示しておいたのもシドニーである。

人目に触れれば騒動になりそうだったので。

「神父様。あの腕輪は？」

レイティアがぼんやりと問いかける。

第一王女であるレイティアでも、ほとんど見かけないほど高価な腕輪。

それをしている者が普通の身分の出身のわけがない。

「申し訳ございませんが、わたしにもわかりかねます」

「では彼がここにくる前から身につけていた？」

「はい。それ以上のことはわかりません。アベルは孤児院に預けられるまで、どこでなにをしていたか、なにも憶えておりませんので」

「そうなのですか。やんごとなきご身分の方とお見受け致しましたが」

「変なこと言わないでっ」

「お姉ちゃん」

はっきりとは見たことはなくても、あの腕輪がそうとう価値のある物だとわかるシスター・エルは震える声を出す。

弟分のアベルが貴族階級の出身かもしれないなんて、彼女には受け入れられないことだったので。

もし事実だとしても捨てられていた時点で関係ない。

それが彼女の意見だった。

「でも、あの腕輪に使われていた紋章。どこかで見たような……」

レティシアも遠くを見る顔になる。

意外な発見にだれもが言葉を失っていた。

第2章 王位継承権の行方（1）

「そうか。レティがそんなことを」

宮廷に戻ってきて1番に父ケルト王に妹姫の現状を報告したレイティアは、玉座に腰掛けた父王が面白そうな顔になるのを黙って見ている。

「あの娘も大きくなってきていたのだな。わたしも昔などはよく王都に飛び出しては遊んでいたものだ。宮廷で得られるものなど、ほとんどないに等しいからな」

そのお忍びのときに今の妃と出逢い結婚した強者である。

しかし両親から強い反対にあい、ほとんど勘当同然に家を飛び出したという経歴をもつ国王だ。

兄である前王が急死しなければ、たぶん彼が宮廷に戻ってくることはなかっただろう。

王都で慎ましやかに母と暮らしていたと聞いている。

前王が亡くなったとき、跡継ぎがないという理由から、臣下たちが父を捜し始めたらしい。

しかし野心家がそれを放置するわけもなく、父を名乗る者が5人

も現れたという。

「どうやって第二王子だと証明されたのか、レイティアは知らないが。」

父が第二王子だと認められた後で、どうして平民である母を王妃として迎え入れたか？

それはそのときにはすでに母と父のあいだには、レイティアたちが生まれていたからだ。

母の出自はともかく父の血を引いているなら、レイティアたちは立派な父の跡継ぎ。

だから、渋々母のことを認めたと聞いている。

そういえば……とレイティアは気になることを思い出した。

「お父さま」

「なんだ？」

「前々から気になっていたのですが、わたしやレイティが王位を継ぐに当たって、問題視されていることがあるそうですね？ それは一体なんですか？」

このことは小さい頃から何度も問いかけたが、父から答えが帰ってきたことはなかった。

だから、このときも答えてくれると期待していたわけじゃない。

しかし父は苦笑して答えてくれた。

「そうだな。もうレイも知ってもいい頃だろう。もっと近くに寄りなさい」

父に言われてレイティアは玉座に近づいた。

「王位を継ぐに当たって問題視されているのは……これのせいだ」

そう言って父が左袖をまくり上げた。

そこには見たこともない腕輪がある。

見たこともない……はずなのだが、どうしてだろう？

どこかで同じ感じの物を見たことがあるような気がする。

「これがあったからわたしは行方不明の第二王子だと認めてもらえた。これはな、レイ。第二王位継承者の証だ」

「第二王位継承者の証？　では第一王位継承者の腕輪もあるということですか？」

「そうだ」

「ですがわたしは……」

レイティアにもレティシアにも、そういう腕輪はない。

どうということなんだろう？

「第二王位継承者までが、この証の腕輪を授けられる。これは当事者が3歳になったときに授けられるんだ。わたしも3歳のときに父上から授けられた。兄上も3歳のときに第一王位継承者の証である腕輪を授けられたと聞いている」

「その第一王位継承者の証の腕輪は今どこに？ 伯父様にはお子様がいらっしやらなかったから、伯父様がしていらしたのですか？」

亡くなるまで前国王である伯父には子供がいなかった。

その場合、世継ぎがないので、当然だが伯父がしていなければならぬ。

しかしこの問いには父はかぶりを振った。

「お父さま？」

「不思議なことに兄上はこの腕輪を所持していなかった。この世にひとつしかない腕輪を」

「それはだれかに第一王位継承権を譲った後だったということですか？」

驚愕する。

それではレイティアたちはどうなるのだろうか？

「そういうことになるな。兄上はだれかに第一王位継承権を譲った。

それが紛れもない事実だ」

「それでわたしたちの王位継承を認めない臣下がいるのですね」

「第一王位継承権を譲られたのが事実でも、それがだれなのかは不明だし、早急に国王は必要だ。だから、わたしが国王になるのも反対されなかった。

だが、あれから15年。そのときに3歳だったとしたら、最低線で18歳。もしかしたらもう成人しているかもしれない。第一王位継承者はな。だから、臣下たちはレイたちの即位を認めないんだ」

「しかし伯父様にはお子様がいらっしやらなかったのでしょうか？
ご自分のお子様以外に王位継承権を譲るなんてこと……あるんでしょうか？」

そこが問題なのだ。

幾ら前王から正式に継承権を譲られていても、血の繋がりがなければならそもそも王位は継げない。

血統はなにより重視されるものだからだ。

第2章 王位継承権の行方（2）

「問題はそこなんだ。この腕輪はな、王位直系の血を引いていないと、そもそも受け継げない」

「え？」

「王家直系の血を引く者以外が、この腕輪を身につけようとしたら、全身黒焦げになって死んでしまうんだ」

「それでは？」

「男か女かはわからないが、兄上には子供がいたということだろうな。尤も。兄上の妃だった方は兄上より早くに亡くなられているから、今では確認のしようもないが」

ケルトが宮廷を去った理由のひとつに政争が挙げられる。

当時、宮廷内はかなり荒れていた。

もし兄に子供がいても、その子を派手にお披露目したりはできなかった可能性が高い。

兄の急死も暗殺の噂があるのだ。

徐々に毒を盛られたから死んだという噂はケルトも聞いている。

だから、ケルトは王になってから、国の安定に力を注いだ。

兄が果たせなかった夢を果たしたかったのだ。

あの当時、もしケルトが兄の傍にいたら、兄は死ななくて済んだかもしれない。

それはケルトを今も苦しめている後悔である。

「でも、お父さま。ひとつだけ疑問が」

「なんだ？」

「3歳の頃から、そんなに大きな腕輪をしていたら、失くしたりしませんか？　そもそも身体が大きくなっていくときに困りませんか？」

首を傾げる娘にケルトは笑う。

「これは魔法の腕輪」

「魔法の腕輪？」

「よく見てみなさい。どこにも留め具がなければ、溶接の跡もないだろう？」

「そう言われてみれば……」

不思議な腕輪だった。

どこにも繋ぎ目がなく、また留め具もない。

どうやって身につけているのか、まるでわからない。

「しかもな？ この腕輪は持ち主の成長に合わせて大きくなるんだ」

「大きく？ まさか」

レイティアが驚いた声をあげると、ケルトは可笑しそうな顔になる。

「事実だ。わたしが授けられた頃は、この腕輪はもつと小さかった、わたしが成長するとそれに合わせて大きくなったんだ」

「信じられない」

「これは継承しようという意志がなければ外せない。次の者に継承するときにだけ取り外しができるんだ。

だから、兄上から腕輪が消えていた以上、継承権を譲るのは兄上の意志だったという証拠になる」

「そういうことですか。それならわたしたちの王位継承が承諾されない理由もわかります。臣下たちにしてみれば、正当な世継ぎは他にいないのでしょうか」

レイティアはため息まじりに呟く。

「しかし今ではだれも見ることがないのでしょう？ 第一王位継承権の腕輪は。それでそれらしき物を身につけていたからといって、本物かどうか区別できるのでしょいか？」

「そうだな。判断する材料はやはりその特殊性だろう」

「特殊性？」

「魔法の腕輪だと言っただろう？ 幾らそっくりに造っても、同じ特徴を宿す腕輪というのは造れない。本人に譲ろうという意志がなければ取り外しができず、本人の成長に合わせて大きくなり、なおかつどこにも留め具がなく溶接の跡もない腕輪。複製が可能だと思うか？」

「たしかに無理そうですね。お父さまはご覧になったことは？」

「ある。さすがに世継ぎの腕輪というか。それは見事な腕輪で華麗な装飾の施された腕輪だった。あれほどの腕輪は、わたしも持っていないな」

国王でも持てないほど高価な腕輪？

レイティアの脳裏にアベルの顔が浮かんだ。

まさか、とは思う。

たしかに彼のしていた腕輪は孤児院育ちの青年には相応しくない物だ。

だからといってすぐに繋げるのも無理があるだろう。

「お父さまがその腕輪を、わたしたちに譲らなかったのは何故ですか？」

「これを譲ってしまうと、ふたりが第一王位継承者ではないことを証明することになる。それは世継ぎ不在の今、政治的に困るんだ」

たしかに父がしているのは第二王位継承者の腕輪。

それを譲り受けたということは、第一王位継承者、つまり世継ぎではない証拠になる。

それは世継ぎ不在という形になっている現在、政治的に避けた方が無難だ。

正当な王女であるレイティアたちが、第一王位継承権を持っていないとなると、邪な考えを持つ臣下たちが暗躍しないとも限らない。

第2章 王位継承権の行方（3）

「しかしそれではいつまでもお父さまの後継者が決まらないのでは？」

「わたしとしては兄上に本当に子供がいたのなら、その子に王位を譲りたいのだ。レイたちにはすまないが」

父がどれほど今は亡き兄を慕っていたかは、レイティアも知っている。

聡明な国王だったようで、父は兄と対立したくなくて、宮廷を去ったとまで言っていた。

だから、その兄に子供がいたのなら、その子に王位を譲りたいと願うのは、ごく当たり前に思える。

なによりも前王の嫡子なら王位を継ぐ権利がある。

しかしそれはレイティアには歓迎できないことだった。

レイティアは今まで将来、女王になるために頑張ってきた。

妹を巻き込むまいと過保護に育ててきたのも、自分が女王になって妹には苦勞をさせまいと思ってきたからだ。

たしかにその重責から解放されるのは嬉しい。

しかしそれが確定してしまうと、これまでの苦勞はなんだったの

かと、そう問いたい気分になるのも事実だった。

「そういえばお父さま」

「なんだ、レイ？」

「伯父様って素敵な方だったんですね」

「いきなりどうした？」

苦笑する国王にレイティアは微笑む。

「いえ。レティを迎えに行ったときに、伯父様にそっくりな青年と出逢って。すぐ素敵な方だったので、伯父様もとても素敵な方だったのでしょうねと思って」

「兄上にそっくり？」

「そういえばとても見事な腕輪を隠していらっしかったです。あれほどの腕輪にはお目にかかったことはありません」

「……」

「なんだかご本人は知られたくないご様子でしたが」

「その人は……どこに？　どんな青年だっ！？」

突然、身を乗り出した父王に驚きつつレイティアは答えた。

「孤児院を兼ねた教会に身を寄せておいですわ。どうも小さい頃

に孤児院に預けられたとかで、ご本人もそれ以前のことは憶えていらっやらないようです。院長の神父様がそうおっしゃっていらしたから。とても聡明な青年でした」

「歳は？」

「たしか……18だとか。わたしがつい『伯父様？』と呼んでしまったら、まだ18だからおじさんと呼ばれる歳じゃないとかおっしゃっていましたし」

「まさか……」

信じがたいと呟く声に、レイティアは不思議そうに父王を見ていた。

レイシアはあれ以来、孤児院の手伝いをして日々を過ごしていた。

出逢ったときにアベルに問いかけた孤児院の生活を成り立てる方法については、すこししてから理解した。

アベル本人が吟遊詩人として身を粉にして働いて、孤児院や教会の生活を成り立てているのだ。

彼に言わせれば、それがこの歳になるまで育ててくれたシドニー神父への恩返しだという話だった。

アベルの歌声は素晴らしく、ふと耳にただけで聞き惚れる。

そこまでの腕前を持っていなければ、とても現状維持できなかっただろう。

普通に家庭を支えるのだって大変なのに、アベルが支えている家計は孤児院に教会だ。

普通の稼ぎでなんとかなるわけがない。

それをなんとかしてしまるのがアベルだと、フィーリアが自慢していた。

フィーリアがシスター見習いなんてできるのも、アベルのおかげだと彼女はとても誇らしそうに言っていたものだ。

シスターになるには専門の学校に通わないといけないのだ。

つまりシスターになるにもお金がかかるということである。

それを可能にしているのもアベル、という話になるのだ。

彼がいなければこの孤児院も教会も、そしてフィーリアの将来も、すべて成り立たない。

お金はたしかにないかもしれない。

レティシアからみれば、彼らの食事風景や着ている服などは、とても質素だ。

だが、そこにはお金では買えないものがある。

アベルの人柄を知るほど、レティシアは彼のことが気になりだしていた。

第2章 王位継承権の行方（4）

「エルさんはどうして貴族がキライなんですか？」

教会の掃除をしながら、ふとレティシアは気になっていたことを問いかけた。

一緒に掃除をしていたエルがふと手を休める。

「どうして……ねえ。一言で言えば貴族がいても、なんの役にも立たないからよ」

「でも貴族がいないと、この国は成り立ちません。貴族たちが政を動かしているのだし」

「政で私腹を肥やすのも貴族だしね？」

エルに皮肉を言われてレティシアは黙り込む。

そういう貴族が多いのも事実だったので。

「前王だって貴族たちが暗殺したって専らの噂じゃない。あれほど国のために尽くしてくれた王様を」

「え？ まさか」

まるで知らされていない噂に、レティシアは耳を疑う。

彼女は箱入り娘なので、こういう噂は耳に入らないからだ。

「あたしはまだ子供だったけど、噂でよく聞いたわ。貴族ではなく平民のことを考えてくださる王様を煙たがって、臣下たちが殺したって」

「嘘」

「貴族たちは平民のことなんて、なんとも思っていないの。平民に味方すれば王様だって殺すほどよ？」

信じないとかぶりを振るレティシアに、エルが言い返そうとしたとき、教会の扉が開いて声が響いた。

「エル姉、裏庭の花、摘んでいい？」

「裏庭の花？」

レティシアが呟くとエルは振り向いて笑った。

「またお墓参りに行くの、アベル？」

「ああ。月命日だしさ。好きな酒でも供えてやりたくて。花は必需品だろ？」

「摘んでいいけど丸坊主にはしないでよ？ アベルはすぐにたくさん摘むから」

「わかってるって」

そのまま出ていこうとするアベルの背中に、ここには居ずらかつ

たレティシアは慌てて声を投げた。

「アベルさんっ」

「なに？」

振り向いたアベルが問いかける。

「わたしも行っていいですか？」

必死なその様子とこの場の妙な雰囲気気づいて、アベルはまた揉めたなと察する。

レティシアの素性には気づいていなくても、薄々貴族だと思っているエルは、彼女とは反りが合わない。

そのせいでレティシアが居ずらくなることが多いのだ。

またそれかと納得して声を出した。

「いいけど。ただの墓参りだから退屈だと思うよ」

「構いません。お墓参りは大切だから。わたしも伯父様や伯母様のお墓参りは欠かさずにやっているし」

「ふうん。だったらおいで。連れていくから」

「ありがとうございます」

明るい笑顔で答えるレティシアがくるのを待って、アベルは出て

いった。

裏庭で花を摘んだアベルは、街の酒場ですこし高級な酒を買い、街外れに向かって歩き出した。

レティシアが案内されてきたのは小さな墓だった。

墓地にあるのかと思っていたが、墓があったのは街外れの丘の上である。

ポツンと建っている粗末な墓。

刻まれた名はクレイ。

どこかで聞いたような？ と、レティシアは首を傾げる。

「クレイ將軍。アンタが好きな酒を持ってきたよ。飲んでくれよ」

そう言ってアベルが酒をカップに注ぐと墓の前に置いた。

クレイ將軍と言われ、レティシアはようやくどこで聞いたのか思い出した。

数年前に亡くなった近衛隊の將軍だ。

父の警護もやっていた腕の立つ將軍で、父も彼を信頼していた。

どうしてアベルが？

第2章 王位継承権の行方(5)

「レティシアなら知ってるかな。クレイ將軍のこと」

「はい。お知り合いだったんですか？」

「俺を孤児院に預けたのがクレイ將軍らしいんだ」

「え？」

「両親を亡くした俺をクレイ將軍には育てられないという理由で、孤児院に預けてくれたらしい。つまり血の繋がりはないんだ」

「そうだったんですか」

「育てられないのはよくわかるよ。近衛隊の將軍だ。小さな子供を育てている余裕なんてなかっただろうし、クレイ將軍は生涯独身だったから尚更だよな」

「そうですね。お親しかったのですか？」

「あー。剣術は叩き込まれたかな？」

だから、アベルは見かけより逞しいのかと思って、レティシアは赤くなる。

アベルは顔つきだけなら美青年で通るし、荒事とは縁がなさそうだが、実際には少々の戦闘なら軽く勝ってしまうくらいの腕前の持ち主だ。

腕力もあって腕力自慢の男を倒してしまうほど。

初めてそんな一面を目にしたときは、あまりに外見と似合っていないので（おまけに職業は吟遊詩人だし尚更だ）ビックリした覚えがある。

「アベルさんは將軍を慕われていたのですか？」

「……今はね」

「今は？」

「小さい頃は俺の両親を知っているはずのクレイ將軍が、俺にはなにひとつ教えてくれないことで、よく対立していたから」

「アベルさん」

「両親の名を知りたくてケンカになったこともあった。どうして教えてくれないんだって」

アベルの素性を知る唯一の人。

なのに彼はアベルにはなにも教えてくれなかったのだ。

別に大層な望みを持っていたわけじゃない。

ただ普通に両親の名を訊ねただけだ。

亡くなっているのだから知ったところで意味はない。

アベルはそう思って問いただしたが、将軍が教えてくれることは
遂になかった。

一時は恨んで反発もした。

でも、将軍は死ぬまでアベルのことは見放さなかった。

「ズルいよなあ。死なれてしまったら、いつまでも恨めない」

「アベルさん」

「今はこれでよかったと思ってる。俺は自分の境遇を不遇だとも不幸だとも思っていないから」

そう言ってアベルは地面に座り込むと豎琴を奏でだした。

クレイ将軍が好きだった歌を歌い出す。

レティシアは目を閉じてその歌声に聞き入った。

娘を連れて馴染みの将軍の墓に向かっていたケルトは、ふと眉を
寄せる。

「この歌声は……」

「素敵な歌声。まるで天使のよう」

レイティアはうっとり目細める。

「天使、か。兄上が聞いたら、なんて思ったかな」

「どういう意味ですか、お父さま？」

「いや。兄上の歌声にそっくりだから、ついな」

苦笑する父が伯父を思い出していることがわかるので、レイティアは口を噤むしかなかった。

やがて目の前に広がった光景にケルトは息を呑んだ。

「兄上」

若かりし頃の兄がそこにいる。

地面に座り込んで昔よく歌ってくれた歌を歌っている。

「あら？ アベル様……？」

レイティアの呼び声にアベルがふっと顔をあげる。

同時に豎琴の音も消え歌声も途切れた。

「姉様っ。お父さままでっ」

レイティアが驚愕の声を出す。

「アベルは慌てて立ち上がった。

「ということは王様？　おいおい。冗談だろ」

呟く声も兄によく似ている。

記憶の中の兄そのままの姿にそのままの声。

歌声まで同じ。

そんな偶然あるのだろうか。

夏だというのに彼は長袖を着ている。

ケルトのように。

汗ばんだその服の下に腕輪らしい物を隠しているのがうっすらと見える。

確かめたい。

そんな衝動に駆られていた。

第2章 王位継承権の行方(6)

「レティ。元気にしていたか？」

アベルを視界に入れながら、ケルトはそう言った。

レティシアは嬉しそうに頷く。

「お父さまはどうしてここへ？」

「クレイに報告したいことがあって墓参りにきたんだが、まさか先客がいるとは思わなかったな。クレイとはどういう関係だ？」

アベルは答えられなかったが、レティシアがさっき聞いたばかりの、彼の生い立ちについて父王に話して聞かせた。

「クレイから本当になにも聞いていないのか？」

「教えてくれなかったんだ。それをどうしろって？」

「いや。嫌味ではないんだが。名は？」

「……アベル」

答えるまでに間が空いたことに気づいて、ケルトはアベルの空色の瞳を覗き込んだ。

「本当の名は別にあるのだろうか？」

「……」

「お父さま？」

「どういふことですか？」

娘たちの問いかける声にケルトは、自分の推測を打ち明けた。

「おそらくアベルというのは通称だ。彼には本当の名は別にある」

それはケルトの体験からくる確信だった。

疑っていることが事実なら、彼は自分の本当の名は知っているはずである。

腕輪に刻まれるからだ。

持ち主の名が。

持ち主が代わる度に刻まれる真実の名。

それだけはごまかしがきかない。

アベルはそっぽを向いていたが、レティシアとレイティアの問いかける視線に負けて打ち明けた。

「アルベルト・オリオン・サークル。俺が知っているのはそれだけだ」

名付けからして、やはり普通の身分ではなかったらしいと、レイ

ティアは納得する。

ケルトは今聞いたばかりの名を口の中で繰り返した。

（アルベルト・オリオン・サークル。それが略称だとしたら、おそらく続くのはディアン。正式名はアルベルト・オリオン・サークル・ディアン）

世継ぎはサードまで名付けられるのが決まり。

彼の名付けが、それに従っているとしたら間違いない。

彼は兄の、前王の世継ぎなのだ。

後は腕輪を確認できれば動きようもあるのだが。

「何故名を隠していた？」

「平民には聞こえない名付けだし、普段名乗るには目立ちすぎるからって……クレイ将軍がアベルと名乗れって」

（つまりクレイは知っていたわけだ。彼が兄上の子であると。いや。もしや世継ぎと承知で王都に匿ったのか？ 彼を護るために）

孤児院に預けたのも、その後何度も様子を見にきていたのも、そして何度問われても両親の名を教えられなかったのも、彼が兄王の子だとしたら不思議ではないのだ。

彼が孤児院に引き取られたのが15年前だとすると、当時はケルトが即位したばかりだが、前王は賢王で知られていたので、その名

が知られていないということは考えられない。

つまり素性を知らずに育つていようと、彼には両親の名は言えないということになるのだ。

言ってしまうえばそれが前国王であると彼にもわかるだろうから。

彼が育ってきた背景はすべて彼が生来の世継ぎであることを示している。

まさか彼を預けたのがクレイ將軍だとは。

謀叛と受け取るのは簡単だが、この場合、兄に忠誠を誓っていたクレイ將軍だ。

彼の身を護るために匿ったと見るべきだろう。

そのくらい当時の政争はひどかったから。

3歳の幼子など簡単に殺されてしまう。

なにしろ彼は賢王と言われた前王の嫡男。

その血筋の正統性と父王の偉大さ故に、彼を疎ましく思う者はきつと少なくない。

（3歳か。幼いな。そんなに幼ければ街に避難させるのも無理はない。クレイらしいというべきか）

堅物と言われていたクレイは、王家に対する血筋も半端ではなく、

それ故にケルトも彼を信頼し身辺警護を任せていたくらいだ。

それだけに兄王の子供の存在を隠していたのが事実なら、感心もするが反面、教えてほしかったとも思う。

すべてを墓の中に持っていくのは、やはり反則だと感じてしまうものだ。

もしだれも気づかなかつたら、どうするつもりだったのだろうか？

この現状ならその確率も高かつただろうに。

「レイから聞いたが、それは見事な腕輪をしているそうだな？」

突っ込まれたくないことを突っ込まれ、アベルは答えに詰まる。

「わたしですら持てないだろうという腕輪に興味がある。一度見せてはくれまいか？」

「……悪いけどこの腕輪は人様にお見せするような代物ではないんです。王様のご命令でも従えない」

そっぽを向いたまま、アベルは素っ気なく言い放つ。

第2章 王位継承権の行方（7）

その様子はケルトには兄王に似てみえた。

兄王も優しげな容貌に似合わず、一度言い出したら退かない一面があった。

顔立ちだけではなく、彼は真実の意味で兄王に似ているらしい。

そう思うだけで嬉しくなる。

時が逆流して兄と逢っているようで。

「王として無理強いしたいわけじゃない。だが、意味もなく見せろと言っているわけでもないんだ。ここはわたしの言うことを素直に聞いてくれないか？ 王として無理強いはしたくないからな」

「どうしてそんなに俺の腕輪なんかに興味があるんだ？」

「では訊くがだれから譲り受けた腕輪か、それともどこでどうやって買った腕輪か、そなたに説明できるのか？」

「それは」

言葉に詰まる様子を見て、ケルトはやはり彼にも覚えのない頃から、所持しているのだと見抜けた。

だから、手に入れた過程や謂れを訊ねられても答えられない。

そういうことなのだろう。

そして疑っていることが真実なら、腕輪が普通の品ではないことは彼も承知しているはず。

だから、尚更答えられないのだろう。

「もしかすると普通の腕輪ではないのではないか？」

この問いにも彼は答えない。

ただ頑なに顔を背けているだけで。

「とにかく見せてもらう」

同意をもらうのを諦めて彼に近づこうとしたら、彼は警戒するよううに身を遠ざけた。

「わたしが王であることは、そなたも理解しているはずだ。逆らっても意味がないとは思わないのか？」

「いやがっているのを無理に確認することが王様のやり方なのか？」

嫌悪を瞳に浮かべて彼が言う。

兄そっくりの顔で、そんな表情をされるのは、さすがに堪えた。

娘たちも心配そうに見ているので、黙って左袖をまくりあげた。

「まあ驚いた。お父さまも腕輪をなさっていたのですね」

レイティアがそう言えば、これまで自分たちにすら秘密にしていた父が、急にそれを明かしたことで、レイティアは怪訝な気持ちになる。

アベルも自分の腕輪とよく似た腕輪を見て息を飲んだ。

「このとおりわたしも腕輪をしている。この腕輪と対になった腕輪をわたしもずっと探していたのだ。

レイティアから話を聞いて、そなたのしている腕輪こそが、そうではないのかと疑っている。

だから、確認したい。協力してくれないか？ そなたにとっても悪い話ではないはずだ」

「まさかお父さま……彼がそうだと疑っていたのですか？」

レイティアが驚いた声を出す。

「まだ確信があるわけじゃない。ただ彼の容姿と持っている腕輪。その類似点がどうにも気になる。わたしの思い過ごしなら、彼には迷惑な話かもしれないが」

見えない話にアベルは眉をひそめる。

「なんの話をしてるんだ？」

「詳しい事情を知りたければ腕輪を見せてくれ。思い過ぎしの可能性がある以上、今はなにも言えない」

ケルト王は真剣なようだった。

アベルは一度は見せようかと思ったが、もしケルト王の疑惑が当たっていたら、自分の平穏な暮らしを根底から崩されそうだと気づいて、最終的には思い止まった。

いつまで経っても腕を差し出さない彼にケルトは不安になる。

誠心誠意を尽くしたつもりだが、彼には通じていないのだろうか、と。

「アルベルト？」

彼の本名らしい名を呼んでみる。

だが、彼は違うというようにかぶりを振ってみせた。

「俺はアベルだ。アルベルトじゃない」

そのまま背を向けようとする彼にケルトは慌てて声を投げた。

「真実から逃げ出すのか？ 真実の自分から」

「王様がなにを知っているのかは知らない。でも、俺はアベルのままでいたいんだ。俺の平穏な暮らしを壊さないでくれ」

「偽りの平穏だ」

冷たく言い返されてアベルが立ち止まる。

しかし振り向くことはなかった。

「そなたが真実わたしが疑っている素性の者なら、そなたにはそなたにしかできないことがある。それから逃げ出して偽りの平穩に浸っている。」

そなたの両親はそれを喜ぶだろうか？ その腕輪がわたしの知っている腕輪なら、そなたにそれを譲ったそなたの両親は、決してそんなことは望んでいない」

顔も名前も存在すら知らない両親の名を出されて、アベルは理不尽な怒りに支配された。

「子供を捨てた親がなにを望むって？ そんなものに応える義務は俺にはないね」

「捨てたわけではない！！」

感情的に言い返してきたケルト王にアベルがようやく振り向いた。

「生きたくても生きられなかった苦しみを、大事な子供をおいて死ななければならぬ辛さを、そなたがわからずにだれがわかってやるのだっ！？」

「まるで俺の両親がだれなのか知っているみたいな口振りだな」

「確実な話ではないかもしれない。だが、その腕輪がわたしの知っている腕輪なら、そなたの両親のことは、わたしがだれよりも知っている」

アベルの両親を国王が知っている。

アベルの両親はそういう身分の人なのか？

「そなたにそなたの両親のことを話してやりたい。だから、そなたがしているという腕輪を見せてくれないだろうか」

会釈程度ではあったが、ケルト王はたしかに頭を下げた。

そのことにアベルだけでなく、彼の娘たちまで驚く。

「頼むから見せてほしい。そなたがしているという腕輪を。人違いなのか本人なのか、わからないままにいるのは、わたしにとっても辛いのだ」

「「お父さま」」

ふたりの驚く声を聞きながら、アベルは諦めて元の位置に戻った。

このまま無視して孤児院に帰ったら、ものすごく後味悪そうだったのだ。

「これでいいのか？」

アベルはそう言って左袖をまくりあげた。

二の腕を覆うほどに大きな腕輪があらわになる。

唐草模様を用いていて幻獣を刻み込まれた華麗な腕輪。

それに使用されている紋章は、ケルトには見慣れたものだった。

代々の国王だけが受け継ぐ紋章。

元々が第二王子であつたがために、ケルトには受け継げなかった
正当な王家の紋章。

「ああつ。やはりっ」

感極まってケルトの瞳に涙が浮かぶ。

「あの……？」

アベルが強ばった声を出したとき、ケルト王の両腕がアベルの身
体を包み込んだ。

「アルベルト。よく……よく生きていてくれた!!」

震える腕に抱かれながら、アベルは困った顔を向けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810y/>

千夜一夜

2011年11月27日06時56分発行